大阪国税局長賞

税に心からの感謝を

高槻市立第一中学校３年
森脇　祥真

「共に生きる歓び」。私の一番好きな花、ニリンソウの花言葉だ。税金のことについて考える時、私はいつもこの言葉を思い出す。

小学二年生のある日、母に連れられて病院へ行った。診察室で医師から告げられたのは「成長ホルモン分泌不全症」。耳慣れない言葉に戸惑いつつも、私は差し出された手紙に目をやった。そこにはたった一言、「通院一回につき五十万円」という桁外れな数字が記されていた。こんな額を月単位で払えるのだろうか。私はただただ不安でたまらなかった。

しかし、そんな胸騒ぎは杞憂に終わった。診断された病気は小児慢性特定疾病対策という制度の対象疾病だったため、治療費の殆どを助成金が肩代わりしてくれたのだ。ガーゼ代や注射器代でお金を負担することはあったものの、その上限も月一万円と決まっており、経済的に困ることはなかった。約二年間通院し続け、最終的に治療費の総額は五百万円に上った。

これほどの長期間治療を受け続けられたのは、紛れもなく助成金、更に言えば、その根幹をなす税金のおかげだ。母から聞かされてそのことを知った時、私は強く衝撃を受け、税金を納めて下さっている全ての方々に感謝と尊敬の気持ちが湧きあがった。

それからは、インターネットや図書館を利用して税金の使い道についてたくさん調べた。

例えば教育では、教科書の無償提供やタブレット端末の貸与、更に私の住む高槻市では給食費無償化までもが実施されており、その全てが税金を元手に成り立っていることが分かった。私たちが病院や学校に行き、何不自由なく暮らせていること。当たり前を当たり前として享受できていること。それらはひとえに、税金なくしてなし得ないのだ。例に漏れず、このことも税金で図書館が建てられていなければ知ることはなかっただろう。

まさに社会の柱、生命線だ。最近は税に対する心ない批判をよく耳にするが、もし世から税金がなくなれば、たちまち生活の至る所で不自由を感じるようになるだろう。「口に税は掛からない」とはよく言ったものだ。税金の行き着く先を正しく理解していれば、そんな放埒な批判の声もなくなるのだろうと切に思う。

確かに税は一度は集められ、「取られた」と思うかもしれない。しかし、それらは種々形を変えて私たちの下に回帰しているのだ。自分の納めた税金が誰かの役に立ち、誰かの納めた税金がまた自分の生活を支えてくれる。これこそ真の助け合いの在り方だと私は思う。

「共に生きる歓び」、それを今一度噛みしめ、感謝して税を納める。それこそ本来、私たち、そして社会全体が目指すべき姿なのではないだろうか。私はまだ中学生だから、およそ消費税という形でしか税金を納める機会はない。それでも、物を買う時には「この税金が何かに役立って欲しい」と願ってお金を払っている。

私はこれからも自らの果たすべき義務を全うし、世の中に精一杯貢献していきたい。